

『海鳴りやまず』舞台化

神戸新聞連載された「海鳴りやまず」が、来四月、梅田の劇団よこしまによって上演される。ポトピアの演劇公演として神戸を舞臺にしたドラマが企画されたのも、大正が昭和初期のむくむく世界を相手にした劇の本質的なものである。鈴木天、大森隆、金子、西吉、少壮員、高橋正一らが演じる。人間

来年4月 梅田コマ



「純粋な男の生き方となしさを描きたい」と語る花登隆さん—東京都港区白金台の自宅で

金子にはロマンがあった…

「金子にはロマンがあった」と、それが、ドラマの主人公となつた。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。

並ぶ大層な作りに見えて、金子から余韻が、大阪の船場には息子一人、三人が息子の理髪店を営む。息子は理髪店を営む。息子は理髪店を営む。息子は理髪店を営む。

人間金子直吉翁と私

橋本隆正 (遺稿)

大正四年五月だった。鈴木商店の重役室に案内されて入る途端「橋本君か、今日からうちの武蔵の勉強を看てもらいたい」この一言が私の生涯を翁に結びつける縁となった。武蔵さんと私とは、よく遊び、よく勉強した。翁はよく二人の部屋をのぞき、二人が机を並べて勉強しているのを見ては、いつも喜びかつ励まされた。子孫のために美田を買わなかつた翁ではあるが、子弟に対しては人一倍深い愛情と理解を持っていた。子弟の将来については、よく勉強して好きな道に進めばよいという、極めて民主的な考え方であったようである。しかし若かつた私は、武蔵さんは無論、長男の文蔵さんも、翁の後継ぎ実業に入る人だと独り合点していた。武蔵さんは「ついに私は東大の哲学科に入学し、H氏の期待を完全に裏切ることになった」と某紙に述懐している。裏切られたのは私だけではない。「橋本君、武蔵はえらいことをやり出したもんじゃのう」「はあ、哲学だそうですなあ」「好きなことをやらせばよいはずであつた翁も、哲学とはさすがに驚かれた。その後、著書も出すようになって、翁と私の所へはその都度それらが贈られて来た。「武蔵の本はえらい読みにくい、君読んだか」「哲学はむずかしい学問じゃのう」などという口の下から、翁なりの理解と興味で、ヘーゲルの弁証法などを語られるところ、いつの間にかわが子の難解な著

文化

鈴木商店の人間模様

「金子にはロマンがあった」と、それが、ドラマの主人公となつた。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。金子は、純粋な男の生き方となしさを描きたいと語る花登隆さん。東京都港区白金台の自宅で。

私十九年の年から、翁ご夫妻に育まれ、鈴木商店の食を喰みつつ翁の最後の日まで、親しく薫陶を受けて来たが、その間、奇行や奇話は一度も見聞しなかつた。逸話が多いためか、世上では金子は奇人だとよくいわれるが、それはまた縹緲たる風貌や無頓着な服装からくる皮相の見方からでもあろうか。翁は実に慕わしく、親しみ安く、思いやり深い、真に人間らしい慈父であつた。大正七年三月、学校の卒業証書を持って翁の前にお礼言上におよぶ。「それはおめでとう、学校を出るといふことは、人から馬鹿にせられぬことじゃ。君には何もいふことはないが、一つだけ饒けしよう。それは聡明とは、人に欺されぬということじゃ」馬鹿正直は私の天性である。人を観る名人の翁がそれを看迷がすはずはなかつたのである。その時以来、聡明という教訓が私の胸深く刻みこまれ、今なお修養の糧になりつつある。鈴木商店が破綻してまだ一年にもならぬ翌春、当の責任者たる翁自身の運命がどうなるか未だ見当もつかぬ当時であつた。そんな時でも翁の私に対する愛情は親もおよばぬものがあつた。「不足じやろうが、東工業でしばらく辛抱しちよるがよい」職に離れて困っていた私である。不足どころか、干天に滋雨の思ひであつた。

昭和九年二月、鈴木商店の整理も大体一段落したところである。翁が、今は亡き岩治郎、岩蔵の両主人を中心に高畑さんと共に再起を計りつつあつた本陣太陽曹達、後の太陽産業に復帰したのも、翁の推薦によつたのである。苦業の十年は速かつた。その間二十余社を支配するに至つた翁再生の事業は金子伝に審かである。翁亡き後は、翁に代つてさながら翁不断の活動をしの

ばせる先輩高畑さんの薫陶を受けつつ、翁晩年の遺業の主流太陽鋳工に在つて今日に至つたのは、総て翁が私に注がれた深い慈悲の賜である。翁は情愛に厚いだけでなく、情操もまた人に優れて豊かであつた。世間では金子は事業一点張りのようにいわれるが、そうではない。鈴木破綻の後も死に至るまで東奔西走、全盛時代と少しも変らぬ活動を続け、仕事から離れるのはいつも夜遅くなつた。夕食後はよく元町通りや生田筋の骨董屋へ散歩するのが楽しみであつた。絵は古今東西を問わず、浮世絵から大津絵、版画、拓本に至るまでゆくとして観賞批評せざるはない有様であつた。書は詩でも、歌でも、漢文でも、一見たちどころに読下す教養が不思議に身につけていた。陶磁器から土器、石器、漆器、鍍金、木彫に至るまで観賞の広さと眼力の鋭さにはしばしば驚嘆したことである。俳句は得意即妙、澀刺として実感が溢れている。遺された数々の秀作は実に達人の芸である。翁に資金と余暇を与えたなら、恐らく松方コレクションにない、もっと幅の広い、金子コレクションを生み、両者合体して世界一の松方・金子大美術館が出来上つたに違いないと、私は心の底からそんな空想を画いてみるのである。翁が蓋世の大事業者であつたことは、自ら経営した七十社に余る鈴木商店の事業と、雲の如く輩出した部下の人材を見れば誰しも異存はないはずである。人間という角度から観れば、智慧の金子、意志の金子、と誰しも讃えるが、情愛の金子、情操の金子、でもあつたことを私は強調したかつたのである。智情意は智仁勇に置きかえられる。ずば抜けて三拍子そろつた最も立派で、最も偉大なる人間金子翁の如きは世紀に一人も出ないだろうと、私はつくづくそう憶いながら合掌するのである。(太陽鋳工株式会社元専務取締役)